

子ども・子育て応援シンポジウム パネルディスカッション

「子育て支援～家庭・地域・企業にできること～」

パネリスト 清川 忠幸氏（清川メッキ工業㈱総務部長）

田中 邦征氏（2児の父親）

林 恵子氏（NPO法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ理事長）

宮口 陽子氏（5児の母親）

アドバイザー 榊原 智子氏（㈱読売新聞東京本社 生活情報部記者）

コーディネーター 西村 重稀氏（仁愛大学 人間生活学部子ども教育学科 教授）

西村氏

- ・4人のパネリストからお話をいただく。その前に、簡単にどのような話をするのか、説明したいと思う。
- ・清川氏は、清川メッキ工業の子育て支援の取組み、企業としてのメリット、取組みにあたって、苦心した点などを話していただく。
- ・田中氏は、次世代育成対策推進法が施行され、その中でも男性の育児休業の取得が推進されているところである。女性は取組みが進んでいるが、男性はあまり進んでいない中で、昨年8月に育児休業を取得された、その経験をお話ししていただく。
- ・林氏は、2006年、すみずみ子育て事業について敦賀市などから委託を受け、子供の一時預かり事業などを行っている。地域の子育て支援について、感じていること、何が大切かこういうことを話していただく。
- ・宮口氏は、お子さんを5人育てていられる。私なんかは、2人でも大変であったのに、5人のお子さんを育てていらっしゃる宮口さんは「スーパーウーマン」だと思う。宮口さんには、日ごろ子育てをしている中で感じていることなどを話していただきたい。
- ・4人のパネリストの話しをいただく前に、少子化の現状などについて、私から説明させていただく。
- ・平成2年度以降、国は本格的に少子化対策に取り組み始めた  
合計特殊出生率は、福井県は1.54と全国（1.37）に比べると非常に高い。しかし、残念ながら、福井県の人口も徐々に減少している。
- ・高齢者は年々増加しているが、青少年は年々減少している。働ける人が少なくなると、企業は活力が乏しくなるし、年金を納める人も少なくなる。今までのように税収がなくなると、生活にゆとりがなくなる。
- ・子どもをたくさん産んでもらうことが国や県、企業の繁栄につながるというわれている。
- ・乳幼児期には医療費、ミルク代など、お金がかかる。
- ・お金がかかるから働こうということで、共働きになると、子どもの養育を

誰がするのかというような悩みが出てくる。

- ・また、専業主婦の場合だと、育児不安が非常に増えてくる。昔は、こういうときは、近所、お祖父母などの支えがあった。今は、3世代同居から核家族化が進んできている。都市化が進んできていて、人間関係の希薄化が進んできている。学校に行くようになると、勉強をしているか、いじめにあっていないかなど、いろんな悩みが出てくる。こういうことを考えてみると、現在の社会情勢では、親だけではなく、社会が全体で子育てに関わっていかなければならないことがわかる。
- ・国や県では、子育てしやすい環境をつくるため、様々な子育て支援策を展開している。仕事と育児の両立のための保育所の充実（延長保育、一時保育、病児保育など）、学童保育の充実、専業主婦のための子育て支援として地域子育て支援センターの充実、子育てマイスター制度、すみずみ子育てサポート事業、また、経済的な支援としての乳幼児医療の無料化、3人っ子応援プロジェクトなど。
- ・福井県は、全国的にみても、働く女性が多く、家庭で子育てしやすい環境ではないのではといわれている中で、福井県は平成17年度に全国で唯一、出生率が上昇し、マスコミ等から注目を集めた。少子化担当大臣も訪れた。
- ・なぜ福井の合計特殊出生率が上昇したのかについて考えると、保育所の整備は10位以内にはいる、児童館、児童センターの整備率1位、学童保育も18位までにはいつている。祖父母との同居率2位（山形県について）で、祖父母も子育てに参加しているため、両親は働きやすい。持ち家率も全国2位、一家族当たりの貯蓄率が全国1位などが考えられる。そして、学力結果も1位か2位にはいつている。このほか、行政が子育てがしやすい社会作りのためにきめ細やかな子育てサービスをすすめている。こういった背景のもとに出生率の上昇がある。
- ・これから更に出生率の上昇を図っていくためには父親の育児参加、両親の働き方（ワークライフバランス）、地域の子育て支援など非常に重要である。
- ・こういった観点から、各パネリストからお話をいただきたい。

清川氏

- ・会社は和田中で、電子部品のメッキ加工をしている。
- ・従業員は200名ほど（従業員の内訳としては、男性が65パーセント、女性が35パーセント）
- ・取り組んでいること
  - ・1人ではできないことを企業として支援したいということで、出前講座（お父さんのための絵本読み聞かせ講座、食育講座）を実施。少しでも家庭で親としての力を発揮できればと思っている。

- ・ノー残業デイを実施することで、家族時間の伸長を図る。
- ・配偶者出産休暇制度
- ・育児休業については、女性は取得率が高い。男性はまだ。
- ・会社としてのメリット
  - ・社員同士での境遇の分かち合いができて、コミュニケーションが図られた。
  - ・入社希望者が増加し、離職率が低くなる。
- ・苦心していること
  - ・父親の育児休については、我々経営者も、どこにいても話題にあがるようになってきている。気づいてはいるが、取り組みしづらい。
  - ・男性が、育児休業を取り出すと、企業としてどのような状況になるのかが、想像がつかない。
  - ・1月とはいわずに短い時間からでも始めていくべきなのかと感じている。
  - ・収入の面でhも男性が休むと、苦しくなるのではないだろうか。国なり、県なりと、協力しながら、対応していくことが大切。

田中氏

- ・福井信用金庫に勤務している。
- ・昨年8月に、5日間育児休業を取得した。
- ・取得のきっかけ
  - ・4歳と1歳の子どもが2人いる
  - ・2人目の子が予定日より1月ほど早く生まれ、未熟児で2週間は保育器の中で生活となった。
  - ・その後退院したが、武生の妻の実家からの通院が続き、向こうの両親からのサポートもあったが、自分でも何か手伝えることがないかと思っていたところ、上司から育児休業をすすめられた。会社としての取得は、2人目だった。
  - ・1人目の子どものときに、育児にあまり協力的ではなかったのも、その反省もあり、育児休業をとることを決めた。なるべく、妻の負担を軽減させたかった。
- ・取得のメリット
  - ・妻から「助かった」と声掛けしてもらった。
  - ・子どもの世話をすることについて、母の大変さと負担の多さを知った。
  - ・子育てには、協力していかなければならないと感じた。
  - ・短い時間ではあったが、家族で過ごす時間が増え、よかった。
  - ・自分自身、子育てに対して、自信を持つことができた。
  - ・夫婦共働きなので、今は保育園へ妻が送迎している状況であるが、私もなるべく家事を手伝うように意識の変化が生まれた。

- ・男性の育児休業を取得している人は少ないが、私のようなモデルケースをいっぱいつくって、外部に発信することで、育児休業取得者が増えていくことを願っている。

林氏

- ・敦賀から来ました。
- ・1991年に子育て支援を始めた。そのころ、子育て支援とかそういう言葉もなかった時代。自分が子育てしていて感じた思いをもとに、お手伝いできることがあればと始めた。
- ・おうちで子育てしている人に対して、初めの10年ぐらいは「なんで支援が必要なの？」という声もあった。しかし、きらきらくらぶに集まる親たちはどんどん増えてきて、「こういうことが一番大切なんじゃないか」、「家において、子育てをしているお母さんたちがリラックスできる場所とか、子どもたちにとってもそういう場所が必要なのだ」と今は確信している。
- ・きらきらクラブとして活動内容
  - ・親子サークルの指導
  - ・入園前児の週2回保育
  - ・季節の保育（夏休み、冬休みなど）
  - ・すみずみサポート事業
  - ・2004年から子育て広場（支援センターよりも少し小さい規模のもの）
- ・基本的に、在宅で子育てしている人に対する支援であるが、おじいちゃん、おばあちゃんがいる人も多くくる。
- ・子育て広場の中では、自然にお母さん同士のコミュニケーションの場ができていっている。育児休業中のお母さんたちも子育て広場の中で子育ての情報を得ている。
- ・次世代（中学、高校生）のボランティアも参加してきている。おじいちゃん、おばあちゃんたちにも、子育ての話をしてもらったりしている。
- ・子どもが生まれるまでは「お兄ちゃん、お姉ちゃん」だった人が子どもが生まれると急に「お父さん、お母さん」になる。赤ちゃんを抱っこしたこともさわったこともない人も多い。そういう人たちを支援していく必要がある。
- ・子育てについて、わからなくて当たり前で、わからないことは恥ずかしいことではない。みんなで助け合っていければいいなと感じている。
- ・特に、中高年の支えが大切。「私たちはこんなこと当たり前にしてたよ」とか、ついつい思いがちだが、そういう気持ちを変えていくことが非常に大事。
- ・おじいちゃん、おばあちゃんたちを対象とした講座などで、「今の環境は昔とは違う。こういう環境の中で子育てをしているんだよ」というメッセー

ジを伝えていくことが重要

- ・最近、一番力を入れているのが、父親の子育ての支援。うちの主人は子育てに参加してきたことはなかったが、最近の父親は、平日でも仕事を休んで園に来てくれる人も多くなってきている。しかし、やっぱり何かしら、言われたから、いってみるといような感覚がある。家事の手伝いも同じ。
- ・もう少し「進んで子育てを楽しむ」ようになっていってくれるといい。
- ・最近では、企業も父親の子育てを応援してくれるし、政策でも進んでいるが、それと同時にお父さん自身が子育ての楽しさを感じてくれることが大事、そういうったところを今後手伝っていきたい。

宮口氏

- ・「5人なんてすごいね～」とよくいわれるが、そんなにたいしたことをしているつもりはない。
- ・私的には、3人兄弟の末っ子で、赤ちゃんの世話をしたことはない。同居の義姉が子どもを生んで、世話を手伝いさせてもらっていて、そんな経験を積んだ分、子育てに関する恐怖心がなかった。
- ・主人のことをいうと、おむつをかえることもできないし、お風呂に入れることもできない。だが、PTAとか、地域活動は一生懸命してくれている。
- ・子どもが成長していく中で、母親にできないことを父親がしてくれればいいと思う。
- ・子育てをしている中で感じることとしては、社会とのつながり、我慢、喜び、苦しみ、ごちゃ混ぜの感情がある。そういう感情をもつことができ、生んでよかった。
- ・子どもは生まれると、結構早い時期に保育所に入れた。私も働かないと、生活していけない。子育てというと、保育所の先生のほうが長いかも。保育所で過ごす時間が長いので、かわいそうかなと思うこともあるが、健やかに育っている。
- ・笑って過ごすことができたら・・・と思いながら、育児している。

質問（女性）

- ・林さんに聞きたい。お父さんの育児参加が必要ということで、私たちもいろいろ事業をしているが、お父さんが、育児参加をしていくためには、女性の働きがけが必要ではないかと感じている。夫婦の関係が非常に大事と思って活動をしている。
- ・NPO法人としての活動は非常に大変だと思うが、どのような活動体系なのか（活動内容、スタッフ）教えてほしい。

回答（林氏）

- ・全体を通して、20人（私を含めて）のスタッフで朝から夕方まで働いている。

- ・ボランティアは30名ほど登録していただいているが、主に行事のときのお手伝いをお願いしている。

質問（男性） ・ 田中さんに聞きたい。田中さんは、会社で育児休業を取得された第1号とお聞きしたが、第1号の方の取得した期間を教えてください。また、田中さんご自身、取得の際に不安に思ったとおっしゃられたが、不安に思った内容とその結果、あと最後に3人目があるとすれば、また取得したいと思うか。

回答（田中氏） ・ 第1号の方も、私と同じ1週間（5日間）取得。  
・ 取得の際に不安に思った内容については、実際に育児休業をとって見て、周りが非常にサポートしてくださったので、戻ったときなんら問題がなかった。ありがたい。  
・ 3人目のときは、これを機会にもう少し長めの取得が可能であれば申請してみたいと思う。

意見（女性） ・ 近所のおばさんとかそういう人も昔みたいに近づいてこない。  
・ 近所の人たちが「こんなに子どもが大事か・・・」のようなことを言われて、残念な思いをした。  
・ 子育てについては、男性にも手伝いをしてほしい。子どものころに父親と遊んだ思いなどは成長してからもずっと心に残っている。

質問 西村氏 ・ 宮口さんにお聞きしたい。  
「子育ては簡単よ」といわれるが、自分の経験を思い出しても、3人目に踏み出せなかったが、5人を産むきっかけは何か。

回答（宮口氏） ・ 同居の夫の父母を近くに住む実家の父母の協力を得ることができた。5人で苦勞もするが、楽しい思いもいっぱいあった。

榊原氏 ・ 林氏とは、2年前にも取材でお会いした。  
きらきらくらぶは、働いている側も来ている側もきらきら輝いていて女性がパワーを発揮する正に実例である。行政も支援すべき。  
ところで、こういったNPO法人は増えているのか。

県子ども家庭課長 ・ NPO法人としては増えていないが、そういった活動自体は徐々に増えてきている。

西村氏 ・児童委員やボランティアなどの協力により公民館単位で行っている子育て支援などはあちこちで増えている。

榊原氏 ・宮口さんは、インターンシップのような感じで、子育ての経験を結婚前にもされていた。また、同居、近居の祖父母の協力を得ることができたことが大きい。

・私の育児は、出産で“母親”という免許をとっていきなり、高速道路へ放り出されたような感じだったので、林さんのような取組み、活動、親が親として自立できるまでの支えが非常に重要だと感じている。

・子ども向けのボランティアの割合が福井は一番高いと聞いた。高齢者などの子どもにむける温かいまなざしなどがよいのであろう。マイスター精度というのも取材したが、こういったものをもっと進めていくとよい。

・清川氏の会社は、職場というスペースの中に子育てについて考える場をつくったことがよい。そこでコミュニケーションが生まれ、会社の雰囲気を変えている。

・企業は、男性の両立支援をやらなかった場合のリスクに目を向けていく必要がある。東京では、メンタルヘルスケアが非常に問題になってきている。若い人には、愛社精神、忠誠心というのがなくなってきている。両立支援を行うことで、会社に対する愛社精神、忠誠心などを呼び戻すことができるようになるのではないか。日本社会が抱えているリスクを回避できるポイントがワークライフバランスに隠されている。

西村氏 ・社会が子育てを支援する。子育て支援が進むということは＝世の中が誰でも住みやすくなるということではないかと思っている。

・隣のおうちでお子さんを生んだら、子育てを手伝ってあげるとか、ボランティアに参加するとか、各人がそういう心をもってもらうことが、子育てしやすい社会につながるのではないかと思う。

・今日はありがとうございました。